河合忠信先生と〈キリシタン版〉研究のことども

元中央図書館　事務部　参事　森　上　　修

もと本学短期大学部教授で中央図書館貴重書室の研究職を兼担されていた河合忠信先生が、平成25年12月13日に逝去された。享年89才であった。

この数年間、先生とは音信が途絶えていて訃報に接し、ただただ心惜しいおもいがしきりである。かつて親しくご教示をねがった一人としてご冥福を祈りつつ思い出すことどもをいくつか述べることにしたい。

先生は昭和60年4月、本学に奉職されるまで天理大学附属天理図書館において長らく西洋古版本の調査、研究に従事され、またイエズス会が九州の地で16世紀末から刊行した〈キリシタン版〉の書誌的研究に熱意を注がれた。

天理図書館編『きりしたん版の研究』（昭和48年刊）に収載された「きりしたん版の書誌解説」（共著）にかかわる緒業績は学界に被益するところ多く、今日もなお高く評価されている。

ところで、中央図書館には〈天正少年遣欧使節〉らがヨーロッパより將来した活版印刷機を使用して帰国途上のマカオにおいて1590年に刊行したデ・サンデ編の『天正遣欧使節対話録』（De Missione Legatorvm Iaponensium）の一本を所蔵する。本書は天正使節に随行したコンスタンチーノ・ドラードらがポルトガルで修得した西欧式活版印刷の技法を駆使して印行したラテン語文の堂々たる冊子本である。わが国ではほかに天理図書館の所蔵本が知られるだけの伝本まれな貴重本であるが、本学所蔵本に関しては一般に公開されておらず、学内関係者の閲覧利用のみにとどまっていた。こうした館蔵本のよりよい有効な活用法について小野村資文館長から相談を受けられた河合先生はまず近大本の存在を外部へ広く報知する必要があるのではないかと具申されて、まもなく近大本の紹介文を丸善の『學燈』（「デ・サンデ『天正遣欧使節見聞対話録』第82巻12号」昭和60年12月刊）に寄稿された。

このことによって、昭和後半期に西独のとある古い教会から発見された新出の近大所蔵本のことが、にわかに世間の注目を浴びるに至った。その後は西洋古版本の研究者たちが来館し、活字組版のことなどを調査されたとのことであるが、こうした貴重本の学術調査に対して、画一的な〈禁閲覧〉の囲みを取りはずし特別利用の措置がはかられたことは洵によろこばしいこととおもう。

なお、本書は戦前に泉井久之助博士（京都大）らによる天理図書館本からの邦訳本が出ているが、戦後の昭和44年、同博士らにより新訳の〈新異国叢書〉『デ・サンデ天正遣欧使節記』が刊行された。その出版にあたっては同博士の門下であられた先生が新訳稿の全文に目を通され、すすんで淨書作業の労をとられた、と恩師の木村三四吾先生（大阪樟蔭女子大）よりうかがったが、そうした事情もあってか近大所蔵本に対しても先生は格別の愛着を寄せられたものと見受けられる。

長い歳月を経てやっと里帰りが叶った伝存二本にめぐり逢え、親しく精査の機を得た奇縁に限りない幸せと誇りを感じていると語られたことが印象に残っている。

先生は本学へ就任された直後から、関西地区の国・公・私立大学図書館員を中心に結成された〈西洋古典籍研究会〉の顧問として後

進の育成にあたられた。その研究会で〈キリシタン版〉に関するテーマで講話をお願いしようという特別企画が持ちあがったことがあったが、これは先生との日程的な調整がつかず、残念にもそれは実現しなかった。

〈キリシタン版〉に関しては前期国字大字本のことで個人的に先生と語りあう機会があった。前期国字本には『どちりいな・きりしたん』（加津佐本1592年刊、バチカン・バルベリニ文庫蔵）と『ばうちずもの授けやう』（天草本1593年刊、天理図書館蔵）とが伝存するのであるが、この前期国字本の大型活字の鋳造方法に関して山口忠男氏（凸版印刷）が父型木活字説を提唱され、中根 勝氏（天理時報社）がそれに疑義を表明されている。この点について、活字鋳造に体験のある小生に意見を求められたのである。

率直なところ、金属母型でない粘土母型においてはその製作は比較的容易であるけれども一個の粘土母型から多量の活字を鋳造するのは困難ではないだろうかと申しあげたように記憶する。実は先生はこの両本をわが国でもっとも詳しく調べてこられた方であり、小生は、バチカン本は複製本でしか見ることができずにいたので両本における実際の印刷具合などについてうかがってみた。それについては、詳しくは覚えないが先出本とみられるバチカン本の『どちりいな・きりしたん』は後出本の『ばうちずもの授けやう』よりも印字面が全体的にぼやけたようでシャープでなかった印象があるとのことであった。天理図書館で拝見することができた『ばうちずもの授けやう』の鋳造活字の印出字様はかなり鮮明であったが、とすればこの天草で印行された『ばうちずもの授けやう』は再鋳活字版と見做しうるのであろうか。この〈キリシタン版〉前期国字本に使用された大型鋳造活字の研究は今後の課題として残されたことになるが、近年、豊島正之氏（東京外大）がこれに関連する重要な見解を学界に発表された（「前期キリシタン版の漢字活字に就て」『国語と国文学』平成22（3）45-60）。この豊島氏説は前期国字本の大型活字（平仮名、漢字）を日本製ではなく天正遣欧使節らがポルトガルから持ち帰った西欧製のものであったとする注目すべき斬新な指摘であり、泉下の先生もさぞかしこうした研究の進展をよろこばれていることであろう。

なお、〈キリシタン版〉の後期国字小字本に関しては新井トシ先生（天理図書館）が精力的に書誌学的な調査を行われたが、実は先生も木村先生と共に明治期にアーネスト・サトーが金沢の古書店で入手した『太平記抜書』（天理図書館蔵）にことのほか関心をお持ちの様子であった。これはあまり知られていない事柄であるが、実は古活字本を研究中の木村先生は本書の6冊全丁の印刷面を概査されたことがあるとのことで、本書の版式は他の〈キリシタン版〉国字本とは異なる点がみられると先生に語られたと言う。つまり、これは日本で行われている袋綴じ冊子本の古活字版と同じ印刷方式によって1丁ごとに組版と印刷を繰り返すきわめて特異な〈キリシタン版〉であることを指摘されたものであったろう。これまでの研究者が全く気付かなかった版本学上の卓見と言うことができる。

河合先生は比較言語学のご専攻で、平成6年4月から同13年3月のご退職時まで7年間もっぱら館蔵本のインキュナブラ（incunabula）を中心とする西欧古典籍類の調査、整理を担当され館員の指導にあたられたが、その業余の日課として、こうした『太平記』や『平家物語』、『伊勢物語』など日本の古典類を多く繙かれたという。これには日本古典学者の木村先生のお導きがあった、と後日うかがったことであった。

ところで、先生が〈キリシタン版〉の研究を推進されていた昭和年代には、長崎で後藤登明宗印が慶長16年に刊行した〈キリシタン版〉の後期国字本『ひですの経』は長らく所在が不明となっていて、一日も早い出現をねがっておられた。ところが、本書は幸いにも米国のハーバード大学ホートン図書館の奥深くに収蔵されていることが、平成21年7月に

折井善果先生（日本大）により確認され、マスコミに大きく報道されるところとなった。先生もこれで一安心をなされたものと思う。参考までに本書は平成23年11月、豊島氏らにより原寸カラー影印版として八木書店から刊行されたことを付記しておきたい。

平成2年ごろであったとおもうが、〈キリシタン版〉と〈慶長勅版〉の印刷技法を比較調査していたとき、慶長8年勅版『長恨歌伝琵琶行』（天理図書館蔵）の調査に際して先生には何かとご高配を賜わった。そのときは全丁にわたる活字駒と匡郭部分を主とする調査を行うことができたが、昨年、関西大学博物館で開催された〈嵯峨本活字フォント研究会〉での発表に関連してたまたま本書を通検し直してみたところ、新たに印字丁の界線内にインテルの使用痕（墨付き汚れの細線）が見付かり、関係者の関心を引くところとなった。

活字駒の両側に入れる込め物の行内インテルの使用痕については、実は角倉素庵刊の嵯峨版『史記』（有界本）においてすでに確認ずみの事柄なのであったが、このような有界本の〈慶長勅版〉にも、〈キリシタン版〉の組版法と共通するこうしたインテルの使用が確認できたわけで、大きな収穫であった。それを先生に報告できなかったことが悔やまれてならない。

河合先生にはご退職後もお世話になることが多かった。旧恩に衷心より感謝の意を表する次第である。

本稿をなすにあたり、大阪樟蔭女子大学図書館の丸谷初江さんにはご多用のなか大変お世話になり厚くお礼を申しあげます。